

## 皇室のみやび―受け継ぐ美―

皇居三の丸尚蔵館（皇居東御苑） 23. 11. 03 から約7か月半

「皇居三の丸尚蔵館」は、皇室ゆかりの美術品などを収蔵・展示しているが、開館から30年を経てリニューアルし、新たに展示スペースを大幅に拡大し、管理・運営は文化庁所管の独立行政法人国立文化財機構に移管され、「皇室に受け継がれた美」に、より広く親しんでもらうことを目指して一部がオープンした。

狩野永徳 国宝《唐獅子図屏風》右隻 紙本金地著色 16世紀・桃山時代



縦224cm、横453cmという破格の画面寸法もさることながら、艶やかな金雲・金地で彩られた岩間を巨大な二頭が闊歩するさまは迫力を備えている。右側の若獅子は、初々しさを残しながらも、すでに王者の片鱗を発揮しつつある。それに対して、

左の獅子は、慈愛に満ちた眼差しを注ぎ、老成した帝王の十分な風格を漂わせている。手前の唐獅子の足もとにほとんど余白がないことや第五扇下方の岩の形態が不自然なほど細長いこと、木の枝や金雲の先端部が第六扇上方にわずかに覗くことから、画面の上下と左側に大きな切り詰めがあったことが予想される。

伊藤若冲 国宝《動植綵絵 老松白鳳図》 絹本着色 江戸時代



松、桐、鳳凰を取り合わせ30幅中で最も格式の高い作品は、画伯がこだわった白の羽の美しさが際立ち、《動植綵絵》の最後に描かれた全身が白鳥は、優雅な描線を用い妖艶な姿に描かれている。

この白羽の輝きは、裏面の黄土と胡粉（ごふん）、表面の丁寧で精密の胡粉の描写が、絹を通して融合して視覚的に見え、描写のこだわりが極めた色と描法のマジックを象徴する作品とされる。

朱の冠と嘴のなまめかしい切れ長の眼を持つこの純白の空想上の鳥には、画伯が生涯独身を通した屈折した性的願望が託されているようである。

女性の服装と化粧をした男性のような白鳳と、彼を見つめる山鳩とは、若冲の秘めた欲望を映すようにも思われる。